

# ふるさと「風」

第二十六号（二〇〇八年七月）

風に吹かれて（ ）

白井啓治

『山躑躅 目立たぬように目立ってござる』

まだ山桜の咲いている頃である。絵と一行文教室の皆さんと野外スケッチに出かけた時に見つけた風景を言葉に落としてみたものである。藪の中に一本だけ、目立たぬように目立ってござる、と赤い山躑躅を心象したときにふと思っ

た。目立たぬように、とは姑息な人間の思考の中だけにしかないのではないだろうか、と。

実際、目立つことには多少のリスクはあるだろうが、それは生半可な目立ちたがり屋をするからであろう。堂々と、立派に目立ってやればちっぽけなリスクなど取るに足らないといえる。現に、というか故事にも言われている。出る杭は打たれるが高く出た杭は打たれない、と。

藪の中に見つけた一本の山躑躅も、必死に目立とうとしていたに違いない。目立たぬようになぞしていたら、生存競争に負けてしまう。精一杯に目だって、その真っ赤な花にミツバチだとか蝶々などがとまって子孫繁栄に力を貸してもらわねばならないのだから。

人に目立つようなことはやってはいけない。

そんな事も言われる。これはしかし、泥棒の格言ではないだろうか。それならば納得がいくが、そうでない人は矢張り目立つことを考えなければいけないし、それが人間としての自然な本能である。

人は誰でも、自分が注目されたい、注目して欲しいと望み、願っている。だからこそ自分を高める努力が出来るのである。これはひとえに目立ちたい、という本能的心理願望と同時に目立たなければお前の未来はないと言う脅迫観念に似た感情によるものであると思うのだが、果してどうなのであるか。

しかし、人間にとつて、生物にとつて目立つ事は重大なことであり、目立つための努力が人間社会をこれほどまでに進化させてきたと言える。

謙遜を美德のように言われる。私はとんでもない、と思っている。

「あなたは素晴らしい人だ。凄いです」  
仮にそういわれたとしよう。多くの人は、この言葉に対して、「いや、とんでもありません。私なんてまだまだです」と応える。そう言うべきであるというサービスマニユアルの暗記のよう

お世辞であれ何であれ、褒めてくれたら先ず「ありがとうございます。褒めていただきとてもうれしいです」と言うべきだと思う。

いやいや、私なんて、とんでもありません、とは褒めてくれた人に対して何たる失礼なのだろうかと思う。

謙った、姑息な謙遜は謙虚とは言わない。人はもつと素直に目立ったことを喜ぶべきである。ありがとうございます、と大喜びすれば、仮に皮肉を意味して褒めた人には「お前さんは愚かな奴だ」と切り返したと同じダメージを与えることが出来る。

皮肉屋を切り返してやることなぞ、どうでもいいことであるが、大声で「ありがとうございます」と言うことで、心の屈託を吹き飛ばし、思考が前向きになってくるものである。思考が前向きな人は自信が全身に満ちあふれ、良く目立ち、美しい。

私達は、もつと素直に（シンプルに）、そして正當に「ありがとう」を声することが必要であろうと思う。

もつと素直（シンプル）で思い出したが、石岡市では「オアシス運動」なるものを展開しており、その作文・標語を募集している、と広報紙に出していた。オアシスなるもの誰が提唱したのかは知らないが、語呂合わせ好きな日本人のよく考えそうなことである。それ自体は悪くはないのであるが、語呂合わせに懸命になりすぎる所為なのかは分からないが、大事なことの核心をぼやけさせてしまっている。

考えた人は、オアシスというものに特別な思いがあったのだろうか。

- ・おはようございます
- ・ありがとうございます
- ・しつれいします
- ・すみません

これらの頭文字をとれば確かに「おあしす」になる。しかし、オアシスになったからと言って、考案者には申し訳ないが、何の意味もない。

「地域の誰もが声を掛け合い、より明るく和やかな潤いある家庭や地域づくりを進めるため」であればその一番大事な事はオアシスではなく、「ありがとう」の一言である。ありがとう、という喜びと感謝を示す一言を大きな声で言うことが出来れば、「おはよう」も「こんにちば」も「こんばんは」の挨拶も何でも出来るようになるものである。オアシスの中で特にいけないのは、「しつれいします」と「すみません」である。運動の趣旨から言ったら、蛇足の言葉である。「しつれいします」「すみません」は会話の中に用いる言葉としては屈託があつて、嬉しくない言葉である。卑猥と言つてもよい。

こんな風に言うとは何でもケチをつける奴、と思われるかもしれない。確かにある種の人たちにはケチであろう。だが、物事の核になるものは一つしかないのだから、これが核なのだという自分自身の考えを持つことが必要である。

一つの作品に表現できるテーマは、長大な作品であれ、小作品であれ一つしかないのだよ、は何時とも言っている言葉である。

### 歴史ガイドに同行して(3) 兼平ちえこ

会報二十四号より「常陸国風土記を歩く会」の皆さんへのご案内コースを紹介しておりますが、四月に（高浜、北根本、田島、貝地地区）五月に（旧石岡市内の寺社を中心とした地区）六月は（染谷、風土記の丘方面）と三ヶ月にわたりました熱心な見学が終了しました。今回は、四月に行なわれました後半のコース

⑧茨城廃寺礎石、⑨茨城廃寺跡、⑩石岡城（外城）跡をご紹介します。

⑧茨城廃寺礎石

十一面観音堂より来た道を田島一丁目十二の表示の所まで戻ります。田島公民館通りに出て左折（右折は公民館へ）、間もなく番犬のいる（吠えますのでご注意ください）Y字路、右の細い道に入る。見上げると茨城廃寺礎石の案内板と小目代公民館がこんもりとした木々の中から浮かび上がってきます。案内板裏側の一段低い所に一つ、直径一メートルほどの円筒に加工された礎石（円柱座造出をもつ古い形式の土台石）の緑の苔が古代の物と感ぜさせてくれます。案内板によりますと、茨城廃寺跡は、石岡貝地二丁目に所在する古代寺院である。昭和五十四年から三次にわたる発掘調査により約一六〇メートル四方の寺域の中に金堂、塔、講堂などの遺構が確認され、八世紀初期の寺院跡であることがあきらかにされた。また発掘調査により出土した遺物の中に「茨木寺」「茨寺」の墨書銘のある土器（現在風土記の丘展示室に展示されており、必見で

す）が発見され、この寺は茨木寺（うばらきのてら）と呼ばれていたことがわかる。この礎石は寺院廃絶後、ここに運び込まれたものであるが、古代寺院を知る資料としては貴重なものである。

#### ⑨茨城廃寺跡

礎石案内板を後にして、ゆるやかな坂を約二十メートル進み、貝地二丁目九の表示の所を左折、約三十メートル先、竹林を背にする民家の後、貝地二丁目十四表示のところを左折。四十

## 補聴器専門店いしおか補聴器

補聴器は、聞こえれば良いというものではありません。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談下さい。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。

お気軽に、お立ち寄りください。

（石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可）

石岡市石岡 2 1 5 8 6

電話 0 2 9 9 - 2 4 - 3 8 8 1

五メートル位前進、そして右へ。左側にある数軒の借家の背後に茨城廃寺跡案内板。⑧と重複する所がありますが一部抜粋してみます。石岡地方は古代には茨城郡と呼ばれていた。茨城廃寺跡は、古くから茨城郡寺跡と推定されていたが、昭和五十四年からの発掘調査により郡寺としての性格規模が明らかにされた。建立年代は国分寺に先行し、八世紀初期と考えられる。伽藍（主要建造物）配置は塔と金堂が東西に並び北に講堂が位置している法隆寺式で、寺域は約一町半四方の規模を持っていたことが明らかとなった。またこの調査で瓦、仏像線刻瓦、金銅・鉄製品、硯、土師器（はじき）、須恵器（すえき）、和同開珎など出土（風土記の丘展示室に展示されている）した。墨書銘の土器で、この寺は「茨木寺」と呼ばれていたことがわかり、全国的にもめずらしく、当時の寺院名を判明する資料として貴重である。

それでは、古代寺院の境内へとまいります。現在では栗畑、野菜畑になっています。その間の道路を境として、左側の借家辺りに金堂・鸚尾も輝いていたことでしょう。その先に五重塔がそびえ立ち、右側に講堂、如何でしょうか、古代の栄華を描くことが出来ましたでしょうか。そして前進、すぐに丁字路、左折し、次は石岡城へと参ります。

#### ⑩石岡城（外城）跡

左折して約四十五メートル先の右側に竹林と電柱が見えます。その間の道、乗用車がすれちがい出来ぬほどの上り坂。頂上はカーブミラー

の背に竹林と杉の木のある丁字路。この竹林は城の濠になつていているという。左折すると、まもなく石岡城（外城）跡の案内板が見えてきます。竹林の切れたところに石の鳥居、キツネさんのお出迎え。岡田稻荷神社、続いて札掛大明神、かつての繁栄を懐かしむかのように静かに鎮座している。広々とした畑を前に筑波の連山も古代からの変らぬまなざしを注いでくれている。南側に恋瀬川を臨む丘陵地。今回は、この広大な景色の中に身を置き、また次回とさせていただきます。

#### 宙に一夜の舞い 二人

七月七日 ちえこ

#### その再会は

伊東弓子

日々いろんな出会いがある。この一週間を、そして一ヶ月間を振り返っても思い出すのが大変なぐらい沢山の出会いがあった。それこそ長い一生には記憶を辿っても思い返すことのできない出会いが山ほどある。

再会と言う出会いがある。若い頃には、気にもかけない仲だったのに、再会によって気持ち之急に接近し、こんなに素敵な人だったのかと認識し、深い親交を持つこともある。こういう出合いは理想の出会いと見える。しかし、中には永久の別れを伝えるための再会というもある。これは残されたものには実に心の痛くなる

再会である。

十年ほど前のことであつた。定年まであと三年。もう一分張りするぞ、と心に決めて新しい年を迎えたのであつた。そして、その年の春の宵のことであつた。

勤め帰りに突然呼びとめる人がいた。次郎さんだつた。

「わーッ、暫くです。お元気でしたか」

若い頃の気持ちたちが蘇って「・・・さん！」と声して飛びつきたくなるほどの一瞬だつた。

「久しぶりです。お元気で何よりです。こんな所で不躰にお願いするのは大変失礼なのですが」と次郎さんは話しを始めた。

何の話かとドキドキしたが、お母さんが入院しており、毎朝夕食時に見回つているとの事であつた。そのお母さんが、私に会いたいのでは非つれてきて欲しいとせがむのだそう。そのうちにと伸ばしてきたのだつたが、今日は思い切つて伺いました、と言うことであつた。

病院は隣町で、二十分位のところであつたし、急いで帰らなければならぬ用があるわけではないので、年寄り孝行だからと快諾し、次郎さんに同道した。

年寄り孝行の思いは事実であつたが、半分は昔を取戻したい感覚が半分あつた事は否定できなかった。お見舞い伺いであるのに、何かしら浮き浮きと楽しい思いが湧いてくるのだつた。

しかし、お母さんが何故私に会いたがつているのだらうか。私にとっては、お母さんには特別な記憶があるわけではない。華やいてくる気

持ちを戒めるかのように戸惑いも膨らんできた。病室に入るなり大きな声がスイツチを押し たかのように突然に響きわたった。

「あーら、よく来てくれたな！」  
私の名前を何度も呼んだ。

「若いな。ひとつも変つてねえ。元気でいたか。今夜はよかった。本当によかった」

手を確りと握り、顔を優しく撫でてくれる。そして、昔を思い出して言った。

「若い頃は、良く来てくれたよな。苦勞はしてねえか。また来てな。きつとな。来てな」

自分の思いだけを精一杯言っているのが良く分かる。若い頃よく来たよな、と言われても実際には数えるくらいしかなかった。それに、今度ゆつくり遊んでいけや、と言われたが一度もゆつくり行ったことも相手をしたこともなかった。

次郎さんとは青年時代の友達だった。農業を継いで両親を支えていた働き者で、静かで優しい人だった。お兄ちゃんみたいな思いを寄せていた。

当時は勉強会やコース、会議に集まってくる仲間と会うのが一番楽しい時間だった。個人的感情や言葉は一切出さずに仲間としてみんなの意識を育てることが大切にされたし、又そうして来た。次郎さんの後姿の見える場所に席をとったりした事が精々であった。

次郎さんが欠席したとき、資料を届けを買って出たことが何回もあったが、畑仕事に出ている次郎さんには、何時も会うことがなかった。

しかし、次郎さんの家に行ったことだけで十分であった。畑に行けば会えることが分かっていたが、家を尋ねただけで十分だった。

お母さんは何時も家も周りの事をしていたらしく、声をかけると直ぐに出てきてくれた。

「今度ゆつくり遊んでいけや」

そう言われ、帰りはルンルン気分でカチュウシヤの歌を口ずさんで自転車走らせた。

その後は、同じ地域で生活してきたが会うこともなく過ぎてしまった。この再会は、病氣のお母さんが呼んでくれたものと思い、感謝する気持ちになった。

先の長くないお母さんのために、月に二度ぐらい次郎さんと一緒に病室にうかがった。夏が過ぎ秋になった頃にはもうベッドから起き上がる力もなくなっていた。握る手に力もなくなつて、言葉も少なく小さくなつてしまった。

耳元で話すようになったある日

「あのな。俺家さこ。嫁にこ」

と訴えるように必死な声で言った。私は、訴えかける目に向かって曖昧な頷きを見せた。帰りがけに次郎さんに、何か言つてましたか、と言われたが、はい、と応えただけで中味は言わなかった。

実際のところ次郎さんは、大好きな人ではあったが、お嫁さんになりたいといった感情が育つものはなかった。振り返れば、青春時代の男友達に過ぎない。

それから間もなくして訃報を耳にした。野辺の送りという姿、言葉がピッタリな別れだった

と聞いた。遠い日の淡い想いを呼び起こしてくれた人と一緒の時間を持てた事は、私にとって新しい力をつくることの出発にもなった。

一年は早いものだった。帰り急ぐ上り坂で、

「今、帰ったと聞いたので追つて来ました。母のことではお世話になりました」

と声をかけられた。しかし、その顔を見て大きな胸騒ぎを覚えた。顔色は悪く生気がなかった。声に余りに力がなかった。それを言うことが憚られ、「いいえ、何もお役に立ちませんでした。季節の変わり目です。お互いに体には気をつけてみましょうね」と当たり障りのない挨拶をして別れた。

それが次郎さんの最後の姿となった。菜の花や花だいのこの咲き乱れる頃、次郎さんは旅だつて行った。

その再会というささやかな喜びを一時与えてくれたのは、何だったんだろうか。お母さんは、生命の終わる寸前に隠していた自分の思いを確りと表現した。お母さんの手伝いをした次郎さんの体には、その時すでに危険信号が点滅しだしていたのかもしれない。だからお母さんを通して「再会」という形を作ったのかもしれない。それは意識を越えた感の働きからくるものかと思議を感じる。

今年も菜の花が春を彩った。繰り返されていく自然に包まれて、人は色々な出会いをして喜び、悲しみ、怒りをぶつつけながら生きていくことだろうと花の一枝を手折って見ている。

自分の体内に、他者の細胞が混ざって生き延びている現象を「マイクロキメリズム」と言う。最近この現象が、健康にも病気にも深く関わっていることが明らかになり、注目されている。(マイクロは少数、「キメラ」は一つの個体の中に異なった形質が入り混ざっている事)

免疫学の定説は、他から進入してきた、自己以外の細胞などは、異物として厳しく排除されるのが常識で、病原体や毒素から身を守り、そのような機能を獲得した生物のみが、今日生き残っているといえるだろう。

ところが最近、妊娠中の母子間で胎盤を通じ、双方向で細胞が移動し、相手宿主の体内で定着して、何十年も生き延びることが分かってきた。マイクロキメリズムは、牛等で既に分かっていたことではあるが、胎盤を通じる以外には、母乳、輸血、臓器移植等でも起こっている。最近DNA解析技術の進歩により、他者起源の細胞を、血液や組織から検出できるようになった。

その一例が米国の60歳代の男性。母親由来の細胞が、色々な臓器に定着し、時によりそれが自己免疫の攻撃目標となって病気になる、逆に、1型糖尿病で壊れた自らの膵臓組織を、母親由来の細胞が、修復している事実も観察されたという。(02年・FHガン研・シアトル)

そうかと思うと、妊娠中、胎児から進入してきた細胞が母の体内に定着し、40年も経ってから、自らの免疫細胞による攻撃目標となり、

関節リュウマチで苦しむ事例も報告されている。

又、母自身が胎児の時、更にその母から進入してきた細胞が体内に定着し、妊娠中の胎児に、母自身の細胞とともに、祖母の細胞も孫に移住した例や、兄・姉の細胞が、母の体内で生き続け、次の妊娠の時、弟・妹に移住した例もある。

免疫機能が未発達の胎児で、母の細胞を十分認識できず、排除されずに住み着くのは分かるが、既に免疫機能が確立している母に、他人である胎児の細胞が進入・定着するメカニズムは、今なお解明されていないという。又、二卵性双生児の胎児の一方が、他方を異物として攻撃し、胚芽死する事実も確認され、免疫機能が未発達なのに、誠に、不可解千万な話である。

もつと理解しがたい話がある。それは母の、HLA(白血球抗原)に胎児のHLAが非常に似ている場合、胎児は流産しやすい。裏を返せば母と異質な方が無事出産する確率が高くなる。これは進化論的には、集団内では、遺伝的多様性が増すほど、生き延びるための利点が多くなるということの現れであろうと述べている。

【更に私の勝手な想像であるが、妊娠は、常に愛情に満ちた夫婦間においてのみ成立するとは限らない。不幸な妊娠や、犯罪がらみなどでも、このようなマイクロキメリズムに支配されるとしたら、知りたくもない真実に愕然とせざるを得ない事もあるだろう。運命を呪うような悲劇は、絶対に避けたいものである。

更に想像を巡らすと、若い綺麗な女性の体内に、Y染色体を持った男性の細胞が潜伏し、特

異タンパク質を産生しているなどと考えたなら、頭が混乱してしまう。逆に、頑迷・強欲なクソオヤジの体内に、優しい母親の細胞がしっかりと定着しているなど、想像もしにくい話だ。

又、マウスで既に確認されていることであるが、母の細胞が胎児の脳内に移住し、子の脳の一部を構成していたという。これがもし人間でも(血液脳関門を突破して)同様な細胞の移住が起きているとしたなら、個人の能力とかパーソナリティとは一体何だ? と疑いたくもなる。さてこうなると、この体は、どこまでが自身で、どれくらいを他人が占めているのか? 更に、被害妄想的になるが、母の細胞が移住してくるのなら、母のガン細胞だって病巣から剥離し、胎児に移住してきて、小児ガン?

総ての科学の進歩は、「奇想天外な仮説」の設定・検証から始まる……と云える。】

さてこれらの事例は、母側・胎児側とも成熟しきった単純な細胞なら、移住先で何十年も生き続けることは考えにくいので、幹細胞(自己増殖能と特定機能を持つ細胞に分化する能力を併せ持つ細胞)か、未分化の細胞が血流中に入り込み、胎盤を通じて新しい宿主側に移住し、定着したものと考えられると述べている。

それではこのようなマイクロキメリズムは、一体どれくらい頻度で起きている事なのか? 報告では通常の健康な人は、血流中の細胞で10万個に1つぐらい。しかし、健康な人でも、組織ではもつと多いに違いないと述べている。

一方「強皮症」(免疫系の攻撃により皮膚の

肥厚やその他の臓器の損傷)で亡くなった遺体の詳細な検査結果によると、本人の細胞100万個につき、リンパ節で、子の細胞105個、母の細胞が190個であった。肺では子の細胞は3750個、母の細胞は760個であった。

この女性患者は、親と子の両方から細胞進入を受け、こんな重病で死ぬことになったのだ。

又、母の細胞が胎児の心筋で産生した抗体が、胎児の細胞を攻撃して心不全を起こす「新生児ループス症候群」や、母の細胞が胎児に進入して起こす「複合免疫不全症」(重要な感染防御細胞を生まれつき持たない)などでは、胎児または新生児は生存できない。まるで、母と子は敵(かたき)同士みたいだ。こんな現象を見ると、進化とは合目的とはいえず、定向性もなく、やみくもに試行錯誤を重ね、盲目的に突っ走っているという感がある。

即ち、環境に適応した遺伝子変化なら生き残れるし、そうでなかったら、いとも簡単に絶滅あるのみ。こんな事を言うとう教育的には不適切かも知れないが、「生命の尊厳」とか、美化して讃えるが、所詮「生命」といへども原子・分子の離合集散する単なる化学反応に過ぎない。鷲鷹などで見られる2羽の雛の1羽は、予備の命とも云われる。進化とはそういうものらしい。

人はDNAに支配され、懸命に子作りに励むが、確実に子孫を残す「ノウハウ」は、未だ、進化のシステムに、しっかり根付いているとは言えないのが現実ではなからうか。

花粉症など、多くのアレルギーや、食中毒、

紫外線トラブル等、いわば、これしきのことさえ克服できない未完成動物。それが现阶段の人類なのであろう。それ故、これほど繁栄している人類に、滅亡などあり得ないと考えるのは、甘過ぎはしませんか：と私は言いたいのだ。

以前にも書いたが、人類はあまりにも不自然に大脳容積が発達し、好戦的で、残虐性の強い方向へと進化し過ぎた。人類の歴史を遡ってみると、道具の改良が食糧事情の改善・人口増に繋がり、更に強欲にも他への侵略・制圧へと発展する。そして征服された者は、密かに力を蓄え、その復讐を繰り返す。これは世界共通の傾向で、繁栄した者が残した文化や遺跡も、所詮権力の象徴に過ぎない。人民が真から大切にされ、穏和で、崇高な歴史遺産など世界のどこかに存在するだろうか？

【私は歴史批判など、かなり横柄な口を利いてきたが、大王が己の権力を誇示するために、例えば、ピラミットを作るにしても、強制労働で命を無くしていった多くの奴隷達。高額な税を搾り取られ、我が子に十分な食事もやれなかった領民達。国威発揚という大義名分のため、戦場で命を落としていった幾多の将兵達の事は、一体どうしてくれるのかと言いたいのだ。】

一方人類は、自然に適應するため、発達した尾骨、犬歯、体毛、副乳などは既に退化を極め、退化器官数は150にも達するという。更に、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚等、生存に不可欠の五官そのものが、極度に機能低下し、体は大人でも生存能力はまるで幼児並。爪も牙も失

った丸腰の嬰兒だ。生まれて数時間で親と一緒に駆け回る野生動物に比べたら、進化に成功した生物とは言い難い。生物学的基礎体力のない、頭でっかちの妖怪まがいの動物など、絶滅寸前の姿といえる。こうして見ると人類は、進化論上、完成度の高い高等生物とはとても言えない。

【そこでまた私の妄想が始まる。歪(いびつ)に大脳だけを膨らまし過ぎた人類の未来。筋肉は痩せ細り、妖怪さながらの容姿。体重を支えきれず、再び四つ足に戻るが、それでも碌に歩行ができない。先祖が魚類だった頃が懐かしく、浮力に助けを求めて、再び海に戻るうにも、鮫どころか、蛸にさえバカにされ、格好の餌食にされる。さればと鳥みたいに空に進出しようと試みても、筋力が無く1mも飛べない。孫悟空がうらやましい。そこで考えたのが、ヘリウムガスを衣服の中にとっぷりと詰め込み、老若男女、皆ドテラ姿に大変身。かろうじて宙には浮いたが、うまく梶が取れない。台風どころか、そよ風にさえ流されて、吹き溜まった所が地獄の三丁目。人類滅亡物語の第一巻終了】

さてそういう事実から考えると、人類こそ、究極の進化を遂げた万物の霊長などと有頂天になっているのは笑止千万。人類は、こんなマイクロキメリズムなどという、超トラブルを克服できない発展途上の一生物に過ぎなく、只今、進化のドラマを試行錯誤の真つ最中なのか？

あるいは長いスパンで見ると、最悪の場合、進化・発展は中途停止。人類自らが招いた環境汚染などで、このまま滅亡していく自然界の単

なる一例に過ぎなく、過去に絶滅していった多くの化石生物と、同じ運命なのか？

更に想像をめぐらせば、知的生物が存在している惑星は、我が銀河系だけでも、100万個はある筈という。なのにUFOどころか、それらしい電波さえ、地球上で全く傍受できないと云うことは、宇宙へ飛び立つほどに文明が発展する頃は、大方その生物は滅亡するという、宇宙に普遍的な原則でもあるのだろうか？

\* \* \* \* \*

話は大分逸れてしまったが、誰でも自問するであろう『自分とは何か？ 人間とは何か？』の中心課題に戻ろう。祖先を遡ると、バカげていると云われるかも知れないが、どうしても宇宙創世まで思いを巡らす。宇宙は、137億年前のビッグバンに始まる。宇宙空間の物質が集まって星ができ、星の集まりが銀河となる。その銀河の数は全宇宙で1000億個と言われる。そして我が天の川銀河には1000億個の恒星がある。その一つの恒星・太陽の下に、地球は46億年前、第3惑星として誕生した。やっと地球が冷却し、海に生命が誕生したが、36億年前。しかし海の環境は、いつも安全な揺りかごではなかった。海底火山が爆発したり、酸欠が起きたり、塩分濃度が激変を起こしたり、それらの多くの試験をかくぐつて、やっと今から10億年前、単細胞生物から、多細胞生物へと進化を遂げた。そして環境の激変に絶えて生き延びるためには、単なる細胞分裂するクロームのみでは、子孫を残せなくなった。そこで

生物は、一大革命を起こし、雌雄に「性」が別れることになり、本来の雌的な単一のものから初めて「雄」というものが7, 5億年前に生まれ、両性で遺伝子を半分ずつ持ち寄り、子孫を残すこととなった。そうすると、遺伝子の組み合わせで、多様性のある子供が生まれ、いずれかの子は生き延び、子孫を残せるようになった。こうして海の中は生命で満ちあふれ、海の深さ、温度、食べ物、天敵など多様な環境に対応し、多くの種に分化していった。そしてついに、我々の祖先に当たる「脊椎動物」が、古生代のオルビス紀（ほぼ5億年前）に誕生する。

浅瀬の海では、植物が盛んに酸素を吐き出し、それが空中に満ちてくると、成層圏以高で、オゾン層となり、太陽光線中の有害な紫外線などが地上に届きにくくなったため、生物はDNAを破壊されなくなったので、まず植物が6億年前、上陸を敢行し、次いで動物が3, 6億年前、両生類として上陸を試みた。以後、両生類↓爬虫類↓哺乳類↓霊長類↓サル目ヒト科として進化し、多くの化石人類を経て、今日の「新人」65億人が存在することとなった。

そして進化の課程で、多くの試行錯誤を繰り返し、やっと辿り着いたのが現在の姿と言える。決して崇高な目的があり、それに向かって一直線に前進したのではない。故に多くの欠陥だらけと言うのが今日の人類の姿と言える。

縄文時代まで、狩猟採集の極めて穏やかな生活をしてきた人類。それが弥生時代となり、食糧を蓄え始めると争いが頻発。それがますます

エスカレートし、ついに人類滅亡に繋がるような武器まで製造・貯蔵する。人類は肉体だけではなく、精神構造も、超欠陥だらけとなる。

そういう中であって、さてそれでは「自分」とは何だ？ 私は、ここでも誠にクールでニヒルな返事しか思い浮かばない。何十億年も続いたDNAの鎖を、私という60兆個の細胞集団が、粛々として維持し、次世代に繋いでいく。ただそれだけ。人種も家柄もナンセンス。一応まともな子孫が永く続けば、それでよし。

でき得れば次世代以降、DNAの安定的な継続に、自分がなにかの役に立てれば、なお結構。祖先や子孫に羞むることのないよう、ささやかな努力を積み重ねるだけ。

そして、私自身、特別な存在でもないし、他者を受け入れられない、鉄壁の個体でもない。たとえどんな他者の細胞が内在しようとも、遺伝子そのものが、何万代もの祖先をゴチャマゼにしてきているのだから。混じり気のない純粹もの等、この世に存在はしない。祖先の中には、無智蒙昧・醜悪極まりない者もいたろう。中には、秀麗・聡明な者もいたかも知れない。自分とは所詮清濁をミックスしたカクテルなのだ。悠久の流れの中で、80年というこの一瞬を、種全体の一部として担っただけのこと。遠い祖先から繋がってきたものを一時、預かって、傷など付けず、そのまま次世代にバトンタッチできれば、それで大満足。即ち、命の鎖を繋げるための、単なる65億分の1の歯車がいい。

(参考文献：日経サイエンス・08年5月号)

昭和三十年代の初めぐらいまでは交通機関も充分に発達していなかったから、不便な地域に住む高齢者などで「一度も汽車に乗ったことが無い」と威張っていた人も居た。

ある村の青年が憧れの東京へ行こうと、背広姿でバス停に待っていた。芝居に出てくる平将門のような乱れ髪のままで散歩中の顔見知りのおばあちゃんが青年に声をかけた。

「お洒落して何処さいぐだ…」

「東京行ってくる」

「んだら、俺ら家の孫も行ってるから、元気でいるように伝えてくれ…」

勿論、青年は、おばあちゃんの孫の住所を知らないが、おばあちゃんにしてみればトウキョウが小さな小さな集落に思えるのである。

岩井北山の合戦で流れ矢に倒れた平将門の首級は、京都に送られたとされているが多くの話があつてどれが本当か分からない。広く言われているのは三条河原に謀反人の首として曝された際に、残党が奪つて東国へ持ち帰り埋葬した場所が神田明神だという説である。

その頃の東京は武蔵野原に海岸線が深く入り込んで現在の皇居辺りまでは海だった。室町時代に江戸城のことを聞かれた太田道灌が「我が庵は松原続き海近く富士の高峯を軒端にぞ見る」と詠んで証明している。神田明神も探索の手が及ばない淋しい漁村の小さな祠であつたろう。

現代は政府も都知事も、大地震のことを考えずに何でも東京に置いて満足しているから日本の人口も十分の一は東京に集まっている。その数は一千何百万とか、つい数百年前まで海水が浸っていた土地に建てられた手抜き設計の高層ビルの安全性は誰が保証するのだろうか。

余計な心配は忘れて、日本が国家として成り立った時代：これは宗教と同じで何処までを信じるかによるが、法治国家としての日本が成立した時期と考えれば「大化の改新」以後であり、地方レベルでは「天武天皇が天智系王朝から政権を奪った時代」になる。石岡市史も、その時代に国司が来たと記録している：に思いを馳せてみた場合、先ずその時代の人口を知りたい。

中央公論社の「日本の歴史」では、奈良時代の集落（郷）の数などから計算して当時の日本の総人口を五百六十万から六百万としている。大雑把に現在の人口の5%ぐらいであろうか、仮に常陸国府が置かれた昔の石岡地区全域でも二千六百人ほどしか居なかつたことになる。

我々は「歴史の里・石岡には常陸国府や国分寺や国分尼寺が在った」など自慢するが、誰も千何百年も前のことを知らないから現在の感覚で判断する。しかし人口が極めて少なく身分関係が厳しかった時代には限られた数の人々が搾取されていた。古墳でも寺院でも権力に従わされた庶民の汗と涙で造られているのである。

「流れる海」と言われた霞ヶ浦が次第に退潮してゆく過程で石器時代、縄文時代から沿岸台地には徐々に集落が形成されていったのである

うけれども、石岡近辺には縄文遺跡と古墳は多いが弥生時代の遺跡は少ないと言われている。

石岡市史や埋蔵文化財分布地図で見ると旧石岡地区の縄文遺跡は龍神山麓から高浜台にかけて恋瀬川流域に大きなものがびっしりと在るが弥生遺跡は染谷、鹿の子、茨城台地など数える程しかない。そして、これは市街地の調査が困難な所為もあるうが市の中心部が空いている。現存する「風土記の丘」は論外として、龍神山麓の「宮平遺跡」からは旧石器時代と縄文時代と弥生時代と古墳時代と奈良平安時代にかけての遺物が出ており、宮平遺跡に隣接する「峠遺跡」は縄文時代以降の出土品があるとか、西隣の「波付岩遺跡」も同様らしい。

短絡的な発想だが「石岡の古代文化は龍神山麓周辺に起こり次第に海（霞ヶ浦）に伸びていった。行き着いた場所が常陸国風土記・茨城の郡にある高浜の海だった」と言えないだろうか。

その頃になると海側の行方台地から来た九州系の古墳文化と一緒に、海岸に古墳は造れないから海を臨む高浜台地が開拓され、その延長で高台を龍神山方向に戻って田島・貝地区に茨城郡衙や茨城廃寺が置かれることになる。

中大兄皇子が中臣鎌足と共に謀して「大化の改新」と呼ばれる強引なクーデターにより蘇我王朝を滅ぼし、日本も中央集権国家としてスタートした。常陸国が出来て、その国府を何処に置るかという問題が起こってきた。

中大兄皇子は実質的な初代の天皇（天智）となり中臣鎌足は功績により藤原の姓を貰った。

藤原氏は常陸国の出身だとする説もあるが、近年は次々と新説が打ち出されていて、その一つ「蘇我王朝の常陸鹿島本拠説」があるという。既に二人の学者がそれを主張しているそうので、知人の医学博士であり歴史研究家のN先生が遙々と旅行中のカリブ海から知らせてくれた。そのうちにN先生のご本を戴けるものと思う。

昨年の十一月に始めて参観した古代史セミナーでは「①日本の古代王朝は九州にあった」「②稲作文化は西からでは無く日本海経由で先ず東北に伝わり、そこから広まった」という説をとっている。①は筑波山や筑紫刀禰の名前、行方郡で歌われた杵島曲（きじまぶりー九州の歌）などで証明されるし、②は青森の三内丸山遺跡の存在を考えると、これも妥当性がある。

幸いと言うのも変だが常陸国は北からでも西から来ても突き当たる。仮に稲作（弥生）文化が北方から伝わったとして、霞ヶ浦が半分は海だった時代には、田圃が多い現在の恋瀬川流域にも塩水が満ちていた訳で稲作は出来ない。また高台でも水利が良くなければダメである。

綺麗な水の湧き出る比較的温暖な場所、そこに稲作を基調とした弥生文化が伝わる。従来説では崇神天皇の皇子（豊城入彦命）が柿岡の丸山古墳に埋葬されており、この土地が早くから開けたことを物語っている。筑波山麓の盆地は上昇気流の關係で温暖にして水も豊富である。

「ふるさと“風”」を応援して下さる合田寅彦さんの「すわらし学園」は須釜にあり、合田さんのお友達で、やはり応援して下さいる吉野公

喜（よしのともよし）さんは小幡に居られる。

「筑波山周辺は上昇気流があるから暖かい」と、山懐で自然を大切に暮らしを実践される吉野さんは、福祉環境学部のある東日本国際大学長であり「ノーマライゼーション（障害を持つ方や老人などを健常者の日常生活の中でケアしていこうとする施策）」を提唱されている。

石岡地区では柿岡に一番近い上昇気流と水に恵まれた場所、つまり龍神山麓に先ず稲作文化が到来したのではないだろうか。綺麗な水の湧くところは、また蝮（まむし）の好む場所でもある。遙か崇神王朝の時代に伝えられた稲作と共に王朝の拠点とする大和三輪山麓に住む部族が信奉する蛇神信仰が龍神山麓にも伝えられた。

「ふるさと“風”」第9号でも触れたが「晡時臥（くれふし）山の蛇伝説」がそれである。この話の伝わる「茨城の里」が「常陸国風土記」では那賀（那珂）郡に編纂されており、さらに晡時臥山が水戸（笠間・城里）にも存在することから、その所在地（蛇神伝説の所有権？）を巡り学者の意見が分かっているらしい。

石岡の住人は嘘でも龍神山に一票を投じたいけれども、文学的にはこの類の話が「三輪山伝説」と呼ばれる「神婚説話」であり形を変えて何処にでも伝わる日本の代表的説話だという。つまり小高く形良く、水が湧き、蝮の住む山なら何処にあっても良い話なので、温泉饅頭や煎餅の本舗争いと同じであろう。

この「話の素」は崇神天皇時代に疫病の蔓延

を防いだ「意富多多泥古（おおたたねこ）」という人物の出生に関わる物語であるが、これはどうも「古事記」を著したとされる「太安万侶（おのおのやすまる）」が自分の一族の素性をさり気なく自慢するために追加したように思える。

病気に悩まされる国民を心配した崇神天皇が夢を見る。夢枕に立つた大物主神（三輪山の神）が「意富多多泥古に祭祀を命じれば疫病は治まる」と保健所のようなことを言った。探し出された多泥古が何処の馬の骨か分からないので素性を聞いたら「自分は大物主大神が、陶津耳命（すえつみみのみこと）の娘である活玉依毘売（いくたまよりひめ）」と結婚して生まれた櫛御方命（くしみなかつのみこと）の孫である建甕槌命（たけみかづちのみこと）の子で、意富多多泥古と言う者です」と答えた。

鹿島神宮の祭神である建甕槌命のお子さんなら県民は知っている筈だが聞いたことは無い。私は建甕槌命が大和地方先住部族（技術集団）の指導者なのだと思う。崇神天皇は喜んでその通りにしたら偶然に疫病が収まってきた。

問題は陶津耳命の娘・活玉依毘売が三輪の大物主大神と結婚したという話である。古事記に記載されたところによると、活玉依毘売は評判の美人だった。顔形・姿良く気品のある一人の青年が夜這いに来て（本当に気品があれば夜這いには来ない筈だが）二人は共感して結ばれ、幾日も過ぎないうちに女性は妊娠した。

両親が怪しんで「そなたは妊娠しているようだが、独身なのにどうしてか？」と、現代には

通用しないような質問をした。活玉依毘売は「この誰かは知らないが、イケメンの青年が夜ごとに来て一緒に居るうちに自然に懐妊した」と不自然なことを自信満々に答えた。

両親は、せめて相手の正体ぐらいは知っておかないとマスコミのインタビューには答えられないので、娘に糸巻きの先の糸を針に刺して男の着物に付けるように言いつけた。

翌朝、糸は入口の鍵穴を通り抜けて外に出ており、糸巻きには僅かしか残っていないかった。辿ってゆくと三輪山の神社の前行き当ったので、これは三輪山の神（蛇身）だと分った。

三輪山の蛇物語には、さらに「話の素の素」があつて、それは神武天皇の后妃である「比売多多良伊須氣余理比売（ひめたたらいすけよりひめ）」の出生にまつわる猥褻？な話になる。

三島の渥咋（みしまのみぞく）という豪族の娘で絶世の美人・勢夜陀多良比売（せやだたらひめ）が大きい用事で廁（流れに板を渡した古代の水洗トイレ）に入っていたところ、三輪の神様が紅く塗った矢に変身して流れてきた。

某テレビ番組の落語家なら「ヤーね！」と言うのだろうが、比売が矢を拾い上げて部屋に置いた（衛生上、どうかと思うが、そう書いてある）ところ忽ち麗しき男になって二人はすぐ結婚し（早い！）、伊須氣余理比売が生まれた。そこで伊須氣余理比売は神の子であると言われた。

以上、素の素までは古事記の話だが、さらに「素の素の素」となる話が「日本書紀」にある。こちらのほうは神話時代から抜け出して古墳時

代になるから少し現実味を帯びてくるが：西暦二八〇年頃の築造と推定されている日本で最古（規模では十一番目）の「箸墓古墳」にまつわる悲しくもエロチックな物語である。

日本書紀の崇神天皇十年、「姑」と書かれていたので崇神天皇の皇女ではなく叔母かも知れないが、皇女の倭迹迹日百襲姫命（やまとととひももそひめのみこと）が三輪の大神の妻となる経緯である。この女性は聡明で、未来を察知すると言われ崇神天皇の異母兄に当る建埴安彦（たけはにやすひこ）が大阪で謀反を起こすことを予言している。倭迹迹日百襲姫命の話は日本書紀だけにあり古事記にはない。

「：是後に倭迹迹日百襲姫命は大物主神の妻となる。然れども其の神は常に昼は見えずして、夜のみ来る。倭迹迹日百襲姫命は夫に語らいて曰く『君は常に昼は見え給わざれば、その尊顔を分明に見ること与はず。願わくば暫く此処に留まり給へ。明旦、麗しきお顔を拝さん』と。大神、威儀を正し答えて曰く『汝の言うことは道理なり。然らば、吾は明朝、箆筒に居りて汝を待つ。願わくば我が形を見て驚く勿れ』と。

茲に倭迹迹日百襲姫命は心中密かに怪しみつつも明るるを待ち、以て遂に箆筒を見るに美麗なる小蛇、中に在り。其の長さ太さ着衣の紐の如し。即ち、驚き怖れて叫ぶ。

時に大神、恥じて忽ち人の形となり、その妻に言いて曰く『汝は忍びずして吾に恥じをみせつ。吾も還りて汝に恥じを見せん（あれほど驚くなと言ったのに、お前が私に恥をかかせたか

ら、私も実家に帰ってお前に恥じをかかそう）』と忽ち大空に飛び御諸山（三輪山）へ登る。

倭迹迹日百襲姫命、山を仰ぎ見て悔やみ嘆く。即ち箆を以て陰を撞いて薨ず（箆で女性の一番大切なところを突いて自殺した）大市に葬う。故にその墓を箸墓という。この墓は昼は人は是を造り、夜は神是を造る：」（日本書紀第五）

倭迹迹日百襲姫命は神に仕える巫女なのであろう。三輪山が神の眠る場所、そして神ではない巫女は人間の世界―古墳に葬られる。古墳時代の到来で、神に近い存在だった者も死後は区別されるのだが、霊的な存在を共有させるために「伝説」が作られたと考えられている。

伊須氣余理比売や倭迹迹日百襲姫命のモデルかと思われるのが豊城入彦命の同母妹である豊鋤入姫命（とよすきいりひめのみこと）である。日本書紀にも古事記にも、この女性に「天照大神を祀らせた」と記録されている。年代に疑問はあるが、このときに「神宮皇居分離」がなされ伊勢神宮の母体が大和国に置かれた。

箸墓古墳は三輪山の麓・奈良県櫻井市にあり、古墳の埋葬者として卑弥呼のほか、邪馬台国二代目の耜与、さらに崇神天皇の名も出ている。未確定だが宮内庁が陵墓に指定しているため掘り返して詳しい調査が出来ないのである。

これまで日本最大の大仙陵古墳（堺市）は仁徳天皇陵、二番目の菅田御廟山古墳（羽曳野市）は応神天皇陵、三番目が履中天皇陵とされてきたが、初期の天皇の実在性が疑問視される現代は古墳の研究が古代史を解く鍵なのであろう。

序でに触れておくと規模で四番目の造山古墳は岡山市にある。主が吉備地方の豪族であることは想像できる。五番目が大阪府松原市の河内大塚古墳で大きさは石岡が自慢する舟塚山古墳の倍近くある。実はこれが古墳時代最後のものとされる欽明天皇陵と推定されたのだが、近年になって第六位の「見瀬丸山古墳(檀原市)」が欽明天皇陵らしいと宮内庁が言っている。

その時代(六世紀)には仏教が日本に入ってくる。言葉も文字も違う国からいきなり仏教が入って来て分かる訳が無い。庶民は別だが日本の王朝は早い時代から中国大陸や朝鮮半島と密接な関係があった。神話は大陸系民族の日本列島進出記録であり王朝の出自を曖昧にするため「神代」のことにしたのであろう。

倭迹迹日百襲姫命が箸で変なところを突いてから五年ほど後に、朝鮮半島の国・伽羅(任那―みまな)から公式の使者がやってきた。昔の歴史で有名な神功皇后(応神天皇の母親)の新羅(しらぎ)遠征は疑問視されているようだが他にも多くの日朝交流記録があるので、真偽は不明ながら幾つか抜き出してみる。

○応神天皇五年四月

新羅(しらぎ)から朝貢(貢ぎ物を持って来た)こちらからも使者が行った。その時に無礼があったので新羅を攻めて捕虜を連れ帰った。

○応神天皇三十一年八月

諸国に船を造らせ五百隻ほど完成した。これを集めて置いたら新羅から来た使者が火事を起こして船が焼けた。新羅王がお詫びに船大工を

派遣してきた。

○仁徳天皇十二年七月

高麗(こうらい)が鉄製の楯を送ってきたので、その強度をテストした。

○仁徳天皇四十一年三月

百濟(くだら)に家臣を派遣して彼の地の地図を作り産物を記録させた。

○欽明天皇元年八月

朝鮮半島の国々(高麗、百濟、新羅、任那)から朝貢の使者が相次いでやってきた。この時

に中国大陸から日本に来た者の戸籍を作成したところ七千五十三戸になった。：

この七千余戸とは別に欽明天皇から天武天皇の時代にかけて、人数が判明しているものだけでも七千人ほどが朝鮮半島及び中国大陸から日本に渡来している記録がある。現在でいえば十数万になる勘定である。それらの人員は日本各地に分散居住しており常陸国へも来ている。さらに、天智天皇にも天武天皇にも孫に当たる元正天皇(女帝)の時代・養老元年(七一七)

ギター文化館発「ことば座」第9回定期公演

## 夏休み特集：朗読「ふるさと童話」

8月17日(日曜日)午後1時半開場 2時開演)

石岡に生まれて新作童話

近藤治平作「霞ヶ浦の紅い鯨」

打田昇三作「暗闇の子守唄」

しらみひろぢの語り朗読に小林幸枝が演技手話朗読でコラボレーションします。

前売チケット(2,500円・小学生1,800円)は、ことば座事務局、ギター文化館(0299-46-2457)、いしおか補聴器(0299-24-3881)にて発売しています。

ことば座 〒315-0013 石岡市府中5-1-35

0299-24-2063 Fax0299-24-0150

ギター文化館

2008 CONCERT SERIES

The 15th anniversary

7月20日 SONOROSA

8月3日 佐藤純一 ギターリサイタル

8月31日 北川 翔 パラライカコンサート

9月7日 チャン・デゴン ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35

0299-46-2457 FAX0299-46-2628

十一月には朝鮮半島で新羅が強大化して百済や高麗を圧迫し日本に帰化する者が増えたので身分を保障し年金制度を適用することにした。

新羅が強大化したのは中国大陸の「唐」と結んでいたからで、天智天皇は即位早々に朝鮮半島に軍隊を派遣し、百済（くだら）と高麗を救援しようとして唐と新羅の連合軍に完敗した。「くだらない戦をするからだ！」と皆は思った。それからは方針を転換して唐と国交するようになり遣唐使の出番になったのである。

皇極天皇の時代までは無かった年号が次の孝徳天皇から「大化元年」となったが五年ほどで長門国から珍しい白い雉が献上され「白雉（はくち）元年」に変わった。当時はどうでも良いようなことで年号が簡単に変えられたようで銅が発掘されたから「和銅」、珍しい亀が居たから「靈龜」、大量に金が見つかったから「大寶」などが使われた。「養老」もその一つである。

この年号を用いたと言うより、靈龜元年九月二日に即位して二年ほどで「養老」に変えたのは元正女帝である。諸国に国分寺建立を命じた聖武天皇の伯母さんになる。結婚もせずにして三十六歳の時に母親の元明天皇から、本来は弟の息子が継ぐべき「天皇になれ」と言われてビツクリした。甥が未だ小さかったからである。

「息子から母親へ」変則的な譲位で皇位に就いた元明天皇が「高齢と疲労」を理由に譲位したのは五十五歳のときである。日本の古代を伝える「古事記」や「諸国風土記」を作らせたのはこの天皇であり、平城京（奈良）への遷都も

実行したから単なる「お飾り」ではない。切れる藤原不比等や建甕槌命系・物部氏系の名族・石上（いそのかみ）麻呂が補佐をしていた。

野球で言えば中継ぎで、皇位継承が「寝耳に水」だった元正天皇も、いざとなると積極的に施政方針を打ち出してやる気のあるところを見せた。まず前に述べたよう亀の出現を理由に年号を「和銅」から「靈龜」に改めさせた。

同年の暮れに常陸国久慈郡の女性が当時としては珍しい男子の三つ子を生んだ。自分が生めない女帝は喜んで産婦に褒美として食糧と乳母を与えている。キメ細かい配慮だが気遣いが過ぎると疲れる。其の頃は増え過ぎた寺と帰化人の管理及び農村の疲弊が政治問題化していた。

大事な時期に左大臣の石上麻呂が死んでしまい落胆した女帝は放心状態に陥った。休養するために別荘でも造ろうと、場所を探させたところ「美濃国」が良かろうということになった。美濃は祖父・天武天皇が「壬申の乱」に勝利する切っ掛けをつくった土地で、交通の要衝にあり、また都にも近い。早速、行宮（あんぐう）―（仮宮殿）が関ヶ原近辺に造られた。

靈龜三年（七一七）は年末には養老と改元される。この年のうちに行宮が出来て九月半ばに元正天皇は美濃に行幸した。政治は藤原不比等がいるから心配は無い。しかし景色は良くても退屈である。続日本紀に「行至近江国觀望淡海」とあるから、足を伸ばして琵琶湖が見える場所まで行き、さらに数里離れた多度山に赴いた。

この山麓には落差30m、幅3mほどの瀧が

あって、瀧壺が浅く流れはさらに幾筋もの小さな瀧になっているから汲み易い。土地の人たちは美味しい水だとして、わざわざ汲みに行ったりしていた。瀧の見える場所まで行った天皇は、其の水を汲み取らせて手足を浸し顔を洗った。

山中から湧き出て瀧になる水だから平地の井戸水とは違う。満足した天皇の様子を見て案内をした地元役人は、ここぞとばかりに化粧品のコマーシャルを真似て「名水」の宣伝をした。

「この水で洗い続けますと、お肌はスベスベになり痛いところも直ります。白髪になりかけた者が髪を洗い続けましたところ、やがて黒髪に変わって参ったそうにござります。また目を患っておりました者も効果を頂きました！」

「では、この靈水を都へ届けよ」と命じて元正天皇は皇居（奈良）へ帰った。故事を調べさせたところ、志賀島から出土した「漢倭奴国王」の金印でお馴染みの中国・後漢の武帝が同じような「醴泉―れいせん・酒の味がする水」を得て「老を養う水」と命名した故事を見つけた。酒になる訳はないが、良い水は酒に近いような味がするのであろう。高齢で荒れた手肌も綺麗にする。そこで年号を「養老」にした。

良い水が得られれば「これで酒を醸造したら美味しい酒になるのではないかと飲兵衛は思う。養老元年の暮に「寒い朝に瀧の水を汲み急ぎ都に送るよう」美濃国司に命令が下った。当時の官廷には造酒司（みきのつかさ）という役所があり、中くらいの国司に相当する官位を持つ長官以下大勢の職員が配置されていた。米は播磨

国の灘米が使われたようである。

養老元年、改元と共に諸国の百歳以上、八十歳以上の高齢者表彰が行われたが、庶民はろくな食べ物も無いから長くは生きられない。序でに親孝行者、義夫節婦が顕彰され、特に女性天皇が独身だったから、旦那に先立たれて後家を通じた婦人が立派だと褒められた。元正天皇自身は霊泉の効果で六十八歳まで生きられた。

多度山の瀧水が天皇の御意に叶い其の水で朝廷の酒が造られ、年号が「養老」となって孝子節婦の表彰が行われるとなれば美濃国司の名譽であるが、ここで一番、尤もらしい故事来歴が必要になる。故意か偶然か美濃国から表彰の申請が上がってきたのは次のような事例である。

…多度山の麓に樵(きこり)を生業とする若者がおります。七十余歳の父親と二人暮らしですが貧しい中にも孝養を尽くしておりました。父親は常に酒を好み、飯は食わず酒で寿命を保つ妙な体質のため、酒が絶えれば飢えに苦しみます。若者は働いて得た錢を殆ど酒に変えて、自分は粗末な食事で妻も娶らず孝養を尽くして悔いるところがありません。悩みは父親に飲ませる酒が充分ではないことでした。

ある時、薪を得るために山深く入り、疲れて岩の上に休んでいましたが、つい眠りこんで夢の中に、良い酒の香りを嗅ぎ、ふと目覚めると辺り一面に芳香が漂っています。見回すと正面に一条の瀧があり、良い香りは瀧壺から漂ってくるようです。

不審に思い瀧壺の水を掬い飲んでみると酒の

味がします。然も、酒屋で売る酒と違って格別の芳醇な味わいの酒です。腰の瓢箪に瀧の水を詰めて大急ぎで山を下り、父親に飲ませました。

「これは美味しい酒だ」父親は快く酔って寝てしまいました。それから毎日、薪取りの帰りに瀧壺の水を汲み取って父親に飲ませ、酒代で父親の夜具なども買うことが出来ました。

この噂が里人に広がり、瀧壺の水を汲み取る者が増えましたが、いずれも唯の水でした。…この物語の主人公である孝行息子の名前は、同じ「養老の瀧」の話でも「小佐次」「源之丞」「源丞内」と違っている。そして「養老」改元も孝子が現れ老父を養ったことに由来することになっているが、実は既に述べたように「後漢の武帝」の故事に拠ったものである。百八十年後に、菅原道真が「遣唐使」廃止を建言するが、奈良時代は中国大陸の文化が手本であった。

ところで「石岡市史」の伝説部門に「子は清水」という話が記載されている。柿岡街道に沿う林の一角に看板も出ているが、スーパーで酒が買える今は誰も寄り付かないようである。

…山で薪を取り、それを売って暮らす息子と年老いた父親が村上の里に居た。父親の唯一の楽しみは、息子が買ってきてくれる酒である。その日は薪が売れなかった。重い帰り荷を背負い、やっと一軒の家で薪を買って貰ったが明日の米代にしかならず、酒が買えない。

父親の落胆する様子を思うと足取りが重い。神仏に念じつつ林の道を来たときに、どこからか酒の香りが漂ってきた。「まさか！」半信半疑

で香りを辿って行った先に清水が湧いている。掬って口に入れると正しく酒である。慌てて腰の瓢箪(ふくべ)に水を汲みいれると、喜ぶ父親の顔が目に見えた。

「今日は帰りが遅かったが…」案ずる父親の言葉も耳に入らず、孝行息子は瓢箪を父親に差し出した。漂う香りに父親も相好を崩して泉の水を口に含んだ。まさか水…、息子は心配そうに見守る。「是は美味しい酒だ」父親は大喜びで何度も領きながら満足している。

「よかった」安堵したが不思議でならない息子は、夜の明けるのもどかしく、泉に行ってみた。酒の香りもせず、呑んでも只の水である。「親は諸白(もろはく)麴・米ともに良く精製した酒)子は清水」…親にしか酒にならない。これについて石岡市史には「…常陸府中の代表的産業の酒造業『関東灘』の名に相応しく『子は清水』(の伝説)がある」としている。

年号「養老」の元になった多度山養老の瀧(岐阜県)の水は、最初は酒にならず、お肌スベスベ用の水が本来のものであった。孝行息子の話は途中から出てきたので「強(こわ)清水(長野県)」「子和清水(千葉県松戸)」など東国に伝説として広がり、四国にもあるらしい。

親と子の話として定着するには、その場所が「酒造りの聖地」であることが必要なので養老の瀧付近にも簡単なストーリーながら龍神山のような「関谷龍王(雨壺さん)」「玉倉部の清泉」という蛇神伝説が関ヶ原に残っている。

「ふるさと『風』」の第9号「龍神山挽歌」

でも触れたが、聖なる場所では神に捧げる酒が醸（かも）清純な乙女などが口で嚙んで醗酵させた）された。古代から人が住み、酒の神である三輪山の蛇神伝説が伝わり、名水が湧く龍神山麓は酒造りの聖地跡に違い無いであろう。

龍神山の晡時臥山伝説では、蛇神の子を産んだ母親（努賀毘咩―ぬがひめ）が、怒って昇天しようとする蛇に酒器を投げ付ける。それが片岡の里に残っている：文学的には、これは神話実在性の「証拠づけ」らしいのだが：聖地では酒造りに際して神主がお祓いをして尸童（よしまし―巫女、神子、降童、憑人など）と呼ばれる神霊憑依者が神意を伝える。そこから「神主―老人、児童―孝行息子」となり「名水・酒」が結びついて養老（孝子）伝説が生じたのである：と事典では解説している。

酒の日本伝来は応神天皇時代とされる。本来は聖なるものであり、仏教伝来後は菓として寺院が管理していたようで「日本靈異記」には寺から借りた酒造資金を返さず、牛にされた男の話がある。現代にも「牛候補」は居るようだ。

現存する諸国風土記には「酒造り」に関する項目が凡そ三十ヶ所あるが常陸国風土記には数ヶ所しかない。勿論「子は清水」伝説などは記載されていない。常陸国風土記を編纂した藤原宇合（ふじわらのうまかい）が常陸国の長官として石岡に赴任してきたのは養老三年だから、或いは「養老の瀧孝子伝説」をお土産に持ってきて茨城の里に普及させたのかも知れない。

一方で、「蛇神伝説」は何処にでもある話と

してそれ以前に龍神山に伝わっていたであろう。しかし龍神山と呼ばれるようになったのはごく近年のようで、常陸国風土記が編纂された頃から江戸時代までは、蛇神伝説の原点である三輪山の神を祀っていたため「三輪神山（みわかみやま）↓村上山」と呼ばれていた。

風土記編纂の資料が常陸国府に集められ始めた靈龜元年（715）には、それまで「里」とされた地方自治の単位が「郷」に改められ集落の入れ替えが行われたと推測される。この時代には逃亡する農民が多く「里（郷）」の維持が重要だった。同じ名称の里も出来たであろう。

蛇神伝説を伝える「茨城の里」が二つあることを聞いた藤原宇合は、躊躇無く藤原氏の祖先が関わった那珂川流域の茨城の里を伝説の地として常陸風土記に採録した。勿論、常陸国府が置かれた茨城の里にも「村上山（龍神山）」に伝わる蛇神の伝説」は有ったのだが、村上の地が最初に崇神王朝に依って開発されたことを知り藤原氏との繋がりが無い（崇神系は絶えて婿入りした応神・継体の系統になったとされる）と判断して村上山を収録しなかった。

一方で、この話の中の「努賀毘咩が蛇に投げ付けた盆（ほとぎ―瓦製の容器）」の存在から考えると常陸国分寺・同尼寺用の屋根瓦が運ばれたり、村上地区で焼かれたりする過程で物語として成長し龍神山の周辺（例えば片岡の里など）に広がったとも考えられる。

ところで、石岡の古代を推定する二つの物語は辛うじて現在に残っているが、いずれも伝承

としての存在感が薄い。それどころか、龍神山、柏原池、村上集落に関する歴史的な史料が無く、特に龍神山は古代石岡の成立を推定する貴重な存在だと思うのだが晡時臥山伝説以外には空想的な盗賊の話しかない。これはどうしたことであろうか：後の代に山自体が崩れることを予想して祖先がわざと書き残さなかったのであろうか。それならば仕方はないが：断片的な記録から龍神山は仏教の到来により早くから観音寺という寺院になり、花光院という寺の支配を受け、さらに染屋にある宝持院の末寺・錫杖院だったと推定される。また山頂には村上神社（現在の村上佐志能神社）と混同されていた「稚児の墓」なるものが存在するらしいのだが崩された山には危なくて登れない。

かつては、「村上千軒」と言われるほど大きな集落だったと言われる村上地区も記録が全く無いらしい。いつの時代なのか、村上外記（げき―官職名・少納言の下）という領主が居たと言われ、それが大掾一族らしいのだが詳細不明である。そして現在は「かずみがうら市」に属する旧千代田町の「志筑地区」が府中（石岡）領だった記録が見られる。龍神山の裏に当る鬼越峠が府中と志筑とを結ぶ街道らしく、現在の柿岡街道についての史料が無い。

それらのことを考え合わせると「古代石岡」は鹿の子地区（漆紙文書が出た鹿の子遺跡辺り）が限界だったとは考えられないだろうか。「石岡の地誌」に収録された幾つかの史料を見ての推測に過ぎないが、龍神山麓や村上集落などは古

代の新治郡・那賀郡・白壁郡と茨城郡の接点にあり、時代時代の権力構造によって茨城郡に所属したり離れたりして混乱する時期があった。

遙か昔、崇神天皇の時代から開けていた柿岡地区の文化は、龍神山・村上集落で留まった。

やがて王朝権力が交代し、霞ヶ浦から高浜に及ぶ地域に新勢力が進出し、常陸国府が置かれて現在に伝わる「石岡」が生まれた。

廃寺、国分寺、古墳、国衙跡など、一応は形が見える遺跡の保存は大切だが、永い年月に培われ歴史感を重視される市民の方も多し。特に「石岡の原点」である「龍神山」を崇敬される方は、純粋な郷土愛で昔を偲び、祖先の生き方や古代の様子を知りたがっている。

どうすれば「歴史の里」の看板に恥じない都市が造れるのか？：冒頭に紹介した田舎の婆ちゃんのように時代を超越して思考を千年ほど巻き戻せば、自ずから祖先の立場に立った施策が浮かぶかも知れないのだが：

醸造の町として発展した石岡には古代からの酒造り伝承があり、最盛期の明治中頃には清酒と醤油の醸造業が二十何軒もあったという。

「復刻版茨城県案内」に石岡町：製造業―県下第一の醸造地にして清酒・醤油の醸造高及び名醸は現に関東地方に雄飛しつつあり：とある。

石岡市史では幕末の動乱期に当る安政二年の府中（石岡）酒蔵業者十二戸による醸造高を二千二百八十石（約四十万リットル）としている。

その五年後に、水戸藩の浪士たちが府中の商人五十九名から金銭を押し借り（言い方を変え

れば「強奪」した。その額八百四十七両：奪われた商人の中では醸造業が多い。府中を代表する富裕な商人は醸造業と穀物業だったとか、幾ら富裕な商人でも「尊王攘夷」などと言う勝手な屁理屈で大金を強奪されたのではなかったものではない。得体の知れない「時代の妄想」が石岡を食い潰したのであるか。

== = = = =  
Coffee&Tea Room  
「ふらの」  
ピザ・パスタ・アレ  
ンジ蕎麦・蕎麦会席  
料理のお店です  
(ギター文化館通り)  
営業時間  
11:30 ~ 15:00  
16:00 ~ 18:00  
月・木曜定休日。  
== = = = =

### 「本場のリアフリー」

六月十日から十五日まで、ギター文化館で風の会の二周年展が開かれ、最終日の十五日にはこぼ座の第八回定期公演が行なわれた。

風の会展にもこぼ座公演にも大勢の方のおこしを頂き、この場を借りてお礼を申し上げます。

こぼ座の公演には、結城市から手話サークルの方達が、市のバスを仕立てて、八名の聾啞者の方々と共に観劇にお越しくださいました。この日は、六〇数

名の観客をお迎えしたのですが、三分の一に当たる二十数名の聾啞者の方の前での公演は初めてであった。

今回の公演では、小林さんが矢野恵子さん演奏するジャンベ（アフリカの太鼓）にのって舞うという演出を加えたのであったが、聾者の方々には大いに盛り上がったいただけだ。

舞は「喜びの舞い」と題するものであったが、詩の朗読はせず、ジャンベの調べだけで小林さんに舞い表現してもらった。

プロローグで野口さんのオカリナ演奏で詩を朗読し、舞を舞ったのであるが、聾者の皆さんは、野口さんのオカリナの音色や朗読の音が聞こえないので、小林さんの舞い表現だけが頼りで、静かに観ておられたのですが、ジャンベが鳴り小林さんが舞い始めた途端、聾者の方全員が、ジャンベのリズムに目を輝かせ、体を揺らせ、身を乗り出して小林さんの舞い言葉に参加するのだった。

リアフリーの舞台を自指す私達には万歳を叩きたくなる一瞬であった。その後、後半には万葉集をジャンベにあわせて舞う部分にも、一緒に体を揺らし、楽しんでいただけだ。実に感動の時間を与えてもらった。

公演後、オカリナの野口さんと、聾者の皆さんと一緒に舞台を創り上げる時、我々の固定観念的に思い込んでいた表現の常識のようなものが、未熟者めと叱られているような感覚になるね」と話したものであった。

リアフリーなんて理屈では言つものの、表現の喜びを垣根なく楽しむと言つのは、なかなか難しく、

大いに勉強させられた公演であった。

(近藤)

## 風に舞う

小林幸枝

風の会展最終日の第八回ことば座定期公演は大変嬉しい舞台でした。大勢のお客様、特に聾啞者の方が二十人以上、このような舞台に来ていただける事はとても珍しいことで、とても感激しています。普通の手話劇でもこれ程の聾啞者の方が来ていただける事はありません。

私のバレーボールの仲間も今回は上手くスケジュールが調整できて、福島県や群馬県から、また同級生や聾学校の先生、保母さんなども来ていただけました。

私の知り合いは、殆どの人が運動の万能選手という認識しかないので、朗読舞をみてビックリでした。

今回は、オカリナの野口さんの奥さんである矢野恵子さんのジャンベにのって、朗読のない舞い表現で「飲びの歌」をやりました。普段は矢野さんは野口さんのバックでキーボードやパーカッションを演奏されていますが、今回はジャンベを肩に担いで、私と踊りながらの演奏でしたから、大変だったと思います。練習の後、ジャンベを支える足に青痣がいっぱいになっていたのでみてビックリしました。

健聴者の人は、野口さんのオカリナの音を楽しむことが出来ますが、私達聾者は、オカリナの音はイメージとしてしか分かりません。でも、ジャンベはその音の波動が心に伝わってきます

から、リズムに体を乗せることが出来ます。皆から、今日は一緒に楽しめたと喜んで頂きました。特に、万葉集をジャンベと一緒に舞ったのは迫力があつたと言われました。

脚本・演出家の白井さんは、差別や固定観念で物を考えることを嫌います。舞台は、全員が一体になって楽しめないといけないと言います。これからは、矢野さんなどの協力を貰って、聾啞者も一緒に楽しめるよう舞い表現に工夫をして行きたいと思っています。

## 風の姿を真演して

矢野恵子

皆さん、はじめまして！ 矢野恵子と申します。夫の野口喜広と共に演奏活動をしております。

ことば座公演の参加は、今回で三度目になります。第一回は「新説柏原池物語」、二回目は「鳴滝にて」そして今回の「風の姿」です。

普段私は、主に野口喜広のオカリナの伴奏としてキーボードや琴などを演奏しています。私は縁の下の力持ちと思っていましたら、今回の公演では、舞の小林幸枝さんと共に舞台上でジャンベを叩きながら踊ると言う場面がありました。

オカリナの伴奏としてジャンベを叩く時は、キーボードの脇に固定されたものを叩きますので、肩にジャンベを担いで踊りながら打つと言うのは始めてのことで、なかなか思うように出

来ませんでした。

練習を重ねながら白井さん、小林さんの励ましを受けて、不安が自信に変っていききました。「よし！ この感じだ！」と手ごたえを掴んだのは、本番数時間前に小林さんと二人で練習をしている時でした。

本番では、白井さん、野口からの掛け声や手拍子が入り、舞の民の宴が盛大に行なわれている様子が表現できたように思います。小林さんに引張られるような形でしたが、一緒に演じきったという達成が得られ、私にとっては思いで深い公演となりました。

後日、白井さんからこんな話を聞きました。観に来られた聾啞者の方々は、ジャンベの音で感じる事が出来るので、とても喜んで一緒に踊るようにして楽しんでくれた、と。

その言葉を聞いて、涙が出そうになりました。垣根や固定観念を捨てて、皆と一緒に体を揺らし、喜びあうことこそ音楽の本質。改めてそのことを体感させていただいた、嬉しい舞台でした。

またこんな機会が与えられますことを願いますが、皆さんありがとうございました。

## 編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

Tel 0299-24-2063

(白井啓治方)